評論

夏の趣味

大町桂月

第拾貳卷第拾號

一

冷たい、寒い、暖い、暑いなど、時候に就いて、いろ〳〵の感じがあるが、夏は、暑いと感ずる時也。されど、一面には、涼しいといふ感じも生ずるの時也。

余は、春の暖味を愛す。また秋の涼味を愛す。然れども、吾人の感ずる眞の暖味は、冬に在り。眞の涼味は夏に在り。吾人は凡夫也。暑を離れて寒を知る能はず。苦を離れて樂を知る能はず。烈風白雪を凌ぎて、家に入りて、凍えし手足を爐にあぶる時、吾人は始めて暖味のうれしさを知る。而してこれ夏にありては、却つて苦痛也。金石も溶けむばかりの日光をあびて、柳蔭に就きて、水を掬ぶ時、吾人は始めて涼味のうれしさを知る。而してこれ冬にありては、却つて苦痛也。

夏は炎熱甚しきを以て、吾人は、一方に涼味をあぢはふを得る也。瀧や、川や、湖や、海や、夏に於てのみ、人間に向つてその眞價を發揮し來る。水は寒きもの也。人をして凍死せしむるもの也。唯夏の炎熱と相和して、玆に萬斛の涼味を生ず。余はをり〳〵瀑邊に紅葉を描ける畫を見しことあり。これ紅葉を主として、瀑布を副としたる也。唯紅葉の美を見て、瀑布の美を見ず。瀑布の美を見るも、瀑布本來の涼味を見ず。瀑布を見るは、四時いつにてもよし。されど、瀑布を味はゝむことは、實に夏に限る。涼味の如何に難有く、うれしく、尊きかは、夏の瀑布を味ひたるものにして、始めて之を解すべし。若し畫家にして、瀑布描かむとして、紅葉を添ふるものあらば、これ未だ瀑布を味はゝざるもの也。

夏は、何人も涼味を味ひたしと思はざるは無かるべし。而して之を自然界に求めむとならば、舟に乘れ。水に泳げ。海邊にゆけ。川邊にゆけ。湖邊に行け。殊に山湖の邊に行け。綠樹の間に瀑布を仰げ。さは云へ、人間界にも涼なしとせず。聖人、君子、高士、逸士、志士仁人などの懷を叩かば、萬斛の涼味迸り出づべし。新羅王我尻を喰へと叫びし伊企(いき)灘(なだ)や、補勅を奏せし和氣清麿や、楠公や、四十七士や、笠置山に隱れし解脫上人や、龍口の劍を揮ひし時宗や、那智の大瀑に荒行したる文覺上人や、高松城に自殺せし清水宗治や、すべてこれ日本の歷史に、萬斛の涼味を迸らせり。而して涼味を具體せる人にして、始めて、其涼味を味ふことを得む。憐れむべし、利に囚はるゝもの、名に囚はるゝもの、今の自然主義に囚はるゝもの、衣食の外に餘裕なきものなどは、その涼味に浴するを得ざるべき也。

夏は生々の氣滿ちて、天眞爛漫の趣を見る。家毎に、戸障子を明放して、家も、からッぽう也。人毎に浴衣一枚になりて、身體も、からッぽう也。貧者衣なきを憂へず、富者錦繡をかさぬるに由なし。樂しさは、夕顏棚の下涼にて事足る。心を物質に勞せざるを以て。精神自から伸ぶ。語を寄す、人生の炎熱に喘ぐ者、何ぞ、その家の如く、その身體の如く、心をも、からッぽうにせざる。心をからッぽうにせざるが故に、卿等は、人生の炎熱に苦む也。余は常に卒業生の就職難を耳にす。洵に氣の毒に堪えず。現にこの夏、ある有名なる會社にて、わづか月給二十圓の社員一人雇ひ入れむとせしに、之を志望して競爭せし官私大學の卒業生六十人の多きに上れりと聞く。多數者の失望實に想ふべき也。然れども安んせよ。人間を始めとし、地球上の生物、一も空しく餓死するものは無し。唯餘りに始めより多くを望むが故に餓死の思を爲す。若しくは餓死するよりも苦しき思を爲す。鈍、根、運は、成功の三秘訣に數へられたるが、余は、その裡に、一種の眞理あるを信ず。運の非なるを歎つ勿れ。好運は、何人にも必ず少くとも一度は來るもの也。唯運來るも、之を捉ふるの準備をなし置かずば、あたら之を逸す。運を捉ふるの準備が肝腎也。その準備だにして置けば可也。根は精力を意味す、鈍はあせらざるを意味す。生活難の叫び聲も高きが、これも就職難と大同小異の問題なれば、共に之を論ずべし。妄りに利を求め名を求め、安樂を求め、虛榮を求むるが故に、生活難が起る也。分に安んじ、貧に安んじ、物質に屈して、精神に伸び、妄りに他を羨まらず、自から衒はずんば、心自から晏如たり。請ふ、見え坊の衣服を脱げ。虛名の衣服を脱げ。門戸肩書の衣服を脱げ。物慾の衣服を脱げ。脱ぎ〳〵て、衒はず、飾らず、欺かず、衣は寒を凌げば足る、食は餓を凌げば足るの域に至らば、これ心が眞ッ裸體になりたる也。身體が裸體になれば涼しき如く、必も裸體になれば、いかでか涼しから

ざらむや。また何んぞ人生の炎熱を知らむや。心にこの涼味を解して、然る後、人生の火中に入れば、火中また別樣の快味あるを覺ゆべし。足るを知れとは、物質上に足るを知れとの事也。尺蠖の屈するは伸びむが爲め也。物質上に屈するは、精神上に伸ぶる所以也。心をからッぽうになし得るもの、即ち心を眞ッ裸體になし得るものにして、始めて、人生の涼味を占むることを得べし。

墮落の說

墮落の語は、近時多く耳にする所なるが、知らず、墮落とは、如何なる事ぞや。

人生れて幾萬年、境遇により、遺傳により、教育により、精神が次第々々に磨けて、動物の域をさること、益遠くならむとす。これ人間の進步也。然るに、雲霧路に滿ち、お先まッくらになり、退いて、動物の域に逆戻りせむとするものあり。これが即ち墮落せる人也。かゝる精神の充滿せる社會が、即ち墮落せる社會也。

人間の本來は、利己的、孤立的のものなるにもせよ、幾萬年の陶化を經て、利他的、共同的となれるは、これ人間の進步也。然るに利己一方となり、孤立一方となるものは、これ動物の域に逆戻りしたるにて、一種の墮落也。

孝を解し、悌を解し、仁を解し、義を解し、忠君を解し、愛國を解するは、これ人間の進步也。然るに、個人的、若しくは利己的となりて、眼中、親なく、君なく、國家なきに至れるは、これも動物の域に逆戻りせるにて、一種の墮落也。

學問を切賣りして、教育家の能事畢れりと思ふものあらば、これ教育家の墮落也。教育を受けて、師の恩を知らざるものあらば、これ學生の墮落也。唯徒に說法して財と名とを求めて、人を救ふの念なきは、宗教家の墮落也。國家に殉し、國民に殉するの念なきものは、政治家の墮落也。錢を愛するは、官吏の墮落也。死を惜むは、軍人の墮落也。利に迷ふて信用を失ふを知らざるは、實業家の墮落也。一身一家あるを知つて、國家あるを知らざるは、國民の墮落也。以上あげたる墮落は、根本の墮落也。墮落、墮落を生みて、底止する所を知らず。すべて、人生の罪惡は、人心の墮落せるより生ず。墮落しても、なほ墮落せりと自覺せるものは、なほ救ひ易し。動物の域に陷りても、動物の域に陷りたりと知らず、墮落しても、墮落せりと知らず、夜郎自大、頑冥不靈にして、自から得たりとなすものは、眞に墮落したる也。

外貌は、同じ人間也。教育をうくれば、同じく智識を得べし。然れども、遺傳の如何、家庭教育の如何、交友の如何、修養として讀む書物の如何、先輩師傅の如何、習慣の如何によりて、神に近きものもあれば、動物に近きものもあり。神に近づかむとするは、人間の理想にして、眞の發展は之に基づく。動物に近づけるは、人間の理想を失ひて、お先まツくらなるもの也。人間としての發達もなければ、國家としての發達も無し。即ち亡國的國民也。

意氣地なしの腕白者

子を見ること、親に如かずと云へり。余の知人、其子を幼稚園にやりけるが、其子の性質を問はれ

て、答へて曰く、意氣地なしの腕白者と。最も望ましきは、意氣地ありて腕白ならざる人也。腕白なるも。意氣地あらば、なほ取るべし。腕白にして、意氣地なきは、困つたもの也。

腕白とは、氣隨氣儘也。感情に盲動する也、聞き分けが無き也、己れに克てざる也、愛敬の意なき也、主我的也、孝ならざる也、悌ならざる也、順ならざる也。よく發達すれば豪傑となり、惡く發達すれば、ごろつきとなる。大事業家ともなれば、不平家ともなる。剛毅勇猛の士ともなれば、頑冥不靈の徒ともなる。腕白は困つたものなれども、少時の腕白は、必ずしも妄りに壓抑するを要せざる也。

意氣地なしとは、弱き也、臆病也、氣が小さき也、元氣が無き也、快濶ならざる也、屈し易き也、骨なき也。これは、何人にも望ましからざれども、長じて信念が出來れば、強くなり、智が出來れば、大事業が出來るべく、學問が出來れば學者となれるべく、藝が出來れば、藝術家となれるべし。そのまゝに育たば、活動の出來ぬ人となり、劣敗者となり、腰辨當以上の能力なき人となり、親兄弟の厄介者となり、產を破る人となり、ぐずぐずして一生を終る人となる。意氣地なしは、困つたものなれども、少時の意氣地なしは、必ずしも妄りに悲觀するを要せざる也。

今、この意氣地なしと腕白とが合して特質となれる子は、大に困つたものなれども、これとても、必ずしも絶望すべきには非ず。その意氣地なき性質は、自から學問藝能に專注すべく、その腕白の性質は自から藝能の上に覇氣となり、自信となりてあらはるべし。これ、よく行きての上の話し也。惡く行けば、もとより仕方なき人也。

意氣地なしの腕白者とのみにては、未だ人の全體をつくしたりとは云ふべからず。なほこれよりも一層重きことあり。即ち、誠心ある人なるや否や也。誠心あれば、意氣地なき人も、意氣地があるや

うになり、腕白者も盲動せざるやうになる。なほ重きことあり、頭腦の鋭なる人か、鈍なる人か、過敏なる人か、即ちこれ也。頭腦過敏ならば、意氣地なきも多少發達あるべし。鋭ならば、なほ更也。鈍にして意氣地なければ、よく〳〵注意せざれば、萎縮して、魔道に陷るべし。之を腕白の方に見るに、過敏なれば、たいした腕白は出來ず。鋭ならば、何か一かどの事業となりてあらはるべし。鈍なれば、よく〳〵注意せざれば、魔道に陷るべし。

意氣地なしの腕白者は、世上頗る多し。殊に、生れて虛弱なるもの、一人子にて甘やかされて育ちたるもの、富貴の家の子弟などに多く之を見うく。かゝるものゝ父兄の心配實に想ふべき也。現に社會の事業に從へる人の中にても、學者、論客、文士、畫家、諸種の藝人などは、意氣地なしの腕白者が多きやう也。意氣地なしの腕白者も、斯る方面に向つて發展すれば、生存自立の餘地あるべし。されど、それも、天才と刻苦との如何に因ることは、言ふまでも無きこと也。

腕白者に服せしむべき良藥は、艱難也。失敗也。げにや、艱難、汝を玉にす。何人も多少腕白の氣質を有す。されど、多くの艱難にあへば、腕白の枝、自から折れて、眞の勇氣となる。若くは、圓滿となる。而して、腹には、未だ腕白の根を失はず。失はゞ、老廢の外なかるべし。意氣地なしに服せしむべき良藥は、希望也。希望盛なれば。勇氣自然に生ず、少時意氣地なかりし人も、長じては、最早、所謂吳下の舊阿蒙に非ず。艱難の藥と希望の藥とは其効果全く相反して、互に打消すやうなれど、艱難にて腕白の方の枝を撓め、希望にて意氣地無しの方の葉を長せしむる也。而して希望が盛なれば、艱難にうち勝つは、易々たる事也。艱難に屈するは、希望が盛ならざる也。

今茲に意氣地なしの腕白者を敎育せむに、先づ艱難の藥をもちゆきては、必ずや萎縮すべし、ひか

むべし、まがるべし、すねるべし、厭世家となるべし。先づ希望の藥を投じてその意氣地なしの病氣を根治せむと力むべし。かくて十數年を經て、希望盛になり、勇氣生じたらば、然るのち、そろ〳〵難難の藥を與へて、いそがず、あせらず、長き歳月にかけて、腕白の枝だけ折れるやうにすべし。かくて、意氣地なしの腕白者も、中庸の道を得て、其性を全うするを得べし。若し餘りに急がば、或は角を矯めて、牛を殺すの悔あらむ。

ちぎれ雲

◉夏暑ければ、暑きほど、人は一方に喜んで曰く、お米がよく出來ると。稻は熱日に照りつけられざれば、實を生ぜざる也。

◉世に鯉の瀧上りといふことあり。これ必ずしも虛言に非ず。直下せるをも瀧と稱し、三四十度の勾配あるをも瀧と稱す。東北地方に旅行したらむ者は、人ならば、とても、上られぬ三四十度の勾配を上る鱒あるを知れるなるべし。清く涼しき水を求めむとにや、魚もなほ希望に猛進する也。

◉土佐にては、法螺の貝が山に上るといふことが、一般の話柄になり居れり。さきごろ、土佐出身の佐々木侯、祝宴の節、人に語りて曰く、法螺の貝は山に上る、途中巖より落つることあり。法螺の貝は、殼に疵の多きものほど、よく鳴ると。

◉今年の夏、盲人の一組、富士山に上れり。安りに目の明きたるを恃みて、盲人の癖にと譏ると莫れ。世の名利の山に上るもの多し。而して心の盲せざるもの果して幾人ありや。

◉忽ちにして一天かきくもり、忽ちにして銀箭亂射し、忽ちに空霽れて拭ふが如し。痛快なる夕立のさまを人に求むれば、快男子の氣宇也。

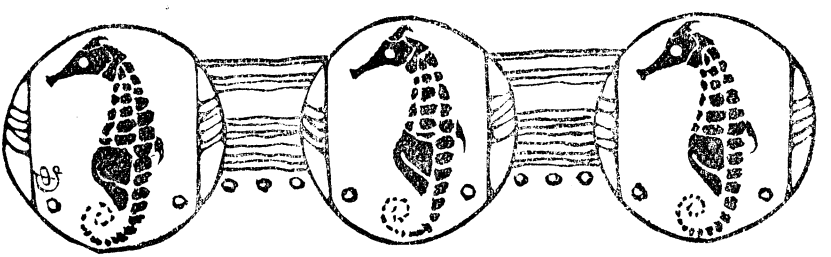
はかなきゆふ日

〔ヘンレイ作〕

岩野泡鳴譯

はかなき　ゆふ日　照りしぼむ
荒れし　海手と　寂し濱、
無言　と　陰の　間　より
何ぞや　奇し聲　下知の聲
いましを　呼ぶは、友　呼ばふ
愛か、ためらひ　得も　爲さじ、
從ひのぼる　道　行けば、
山の　あなたに　遠くして。

都會に　聽けや、町々の
叫ぶ　限りの　生と　死と、
渦卷き　飛びて　突き當り
定り苦闘に　くづるるを。



その聲　聽けば　あきらかに
呼ぶよ、いましは　とゞまらじ、
汝が　愛　棄てて　なほ　切に
山の　あなたに　遠くして。

滿ち干　の　潮の　響き　より、
星と　ランプの　照らし　より、
呼ばふは　風の　そよ吹きて
盡きぬ　牧場の　ある　ところ。
のぞみの　しぼみ、光　より
いましを　呼ばふ、晝も　夜も、
暗きを　越えて　夢うつつ
山の　あなたに　遠くして。

英雄論

藏原惟郭

△英雄の種類

一體我が輩に云はせると、英雄と云つても一概には云へぬ。英雄にも種類がある。即ち其の時代の英雄、百世の英雄、萬世の英雄、又ズッと最下級の眼の前の英雄と、少くも斯う四種類ある。その通り各英雄の位が異ふ。最下級の眼の前の英雄と云ふ奴は、たゞ其の時代の人心を收攬し、千人萬人に優れて持て囃さる人間をいふのである。百世の英雄と云ふのは假令其時代は去つても、後世何時の時代からも歴史上優れた威大なる者として、永く人々から咏嘆される所の者をいふ。其の上の萬世の英雄と云ふのは、時間に限りないもの、即ち此の世に人生時間のあらん限りはその勢力、言論、人格、思想等萬代に超絶して、何人もこれと爭ふべからざるもの、萬生萬民が神とし、佛として崇める處の聖人を指していふのである。或はこれを英雄の英雄ともいふ。

此等の英雄は英雄として各位が異ふ許りでなく、其の人の思想、精神、目的、態度が異ふ。先づ其の目的に依つてこれを區別すると、萬世萬古の英雄は、此の世のあらん限り萬世萬民に幸福、福祉を與へやうとする處の最も威大なる精神信仰を持つたものである。

百世の英雄は專ら、社會國家を目的とし其の人民の幸福安寧を謀つたもの、若くば社會國家の永久の繁榮幸福を目的として全身全力を盡したものである。其の次の時代の英雄は決して萬世萬古に亘る目的でなく、唯其の時代の幸福を滿し、安寧を與へやうとしたものである。第四の所謂目前の英雄と云ふのは、唯自己一人の名譽利達を得しもの、又は一家一族朋友、或は自己と志、黨派を同うしたる者の名譽幸福を謀つた極く狹い範圍のものである。

斯く同じ英雄と云つても、各其の働く目的の範圍が異つてゐるから、此等の英雄を目的の上から觀察することは誠に面白い。萬世萬代に亘る人類の幸福福祉を目的とするものと、百年の經營經綸を目的とするものと、唯自己の『其の時一代の利害を目的とするものと、唯自己の榮譽利達、若くは一家一族朋友、或は自己と志を同うする狹い範圍の利害を目的とするものと、各々其の目的が異ふ。斯く其の目的の異ふ通り、又その目的に對する態度、覺悟、經營、手段等が各異つてゐる。

△萬世萬古の英雄

人類、萬民、萬國を目的とする所の所謂る萬世の英雄の事業は遙に數千數萬年を超絶し、その信仰、目的等が遠大無限であるから、所詮其の時代には解せられない。從つて誤解される。鬼がついたとか、氣狂だとか、魔物だとか云つて、殆んど彼等は對手にされない。然し彼等は決して之れを悲しまず、萬世萬古に亘る人類、萬生の根本と終局とを考へ、大信仰と大犧牲とを以つて、これに到達すべき人生人道の根本の道を說いてゐる。彼等は其の時代の普通の人から誤解された許りでなく、その時代の英雄からも亦誤解された。これは各其の志す目的の異つてゐる以上免れぬことだ。即ち萬年を目的とする英雄の心事が、如何して現在のみを目的とする英雄に解せられやう。又百世の經營經綸を目的とする英雄の心事が、如何して現在自己の榮譽利害のみ目的とする英雄に解せられやう。單に彼等は目的のみでなく、其の思想、精神、生活の世界が異ふ。

これが爲め、彼等は國賊と呼ばれ、狂者と嘲けられ、乞食と扱はれ、その生涯たるや實に慘澹悲痛を極めたものであつた。これを耶蘇の生涯に見るも、如何に慘澹悲劇を極めたものであらう。二十有餘年の苦鬪奮戰、終に十字架に憐れなる死を遂げたのを見ても解る。威大なる理想信仰とを持つて、神の王國、理想の天地を造らんとした彼等の精神が、如何して唯其の時代の物質のみに憧がれてゐる愚なる奴等に解せられやう。

此の爲めに釋迦牟尼も遂ゐに殺された。然も其の死は今に解らぬ。或は毒殺されたといふ説もあるが、これとて果して如何か當てにならぬ。ソクラテースも亦、時代の風紀を亂す者、青年を誤る者、希臘の國法に戻る者として哀れにも毒殺された。支那の孔子とて其の通り屢々生死の境に陷れられ、其の生涯たるや實に慘澹落莫を極めたものであつた。

此等の人と雖、自己の唱へし説が直ちに其の時代に適應されるものと思つたのではない。たゞ自己の確心せしその説と信仰とは軈て何時の世にか行はれる。必ず行はれる時が來るに違ひないと確く信じてゐたまでのことで、其の説が行はれると、行はれないとは全く時代の問題に止る。然し彼等は此那事は意に介せぬ。自己の確心せる信仰に依り、世人の覺醒を促し、世道人心の根本と終局とを考へてこれに到達すべき道を説き種子を播いた。其の種子は幾何播いても、人心の腐れた時代には腐れもし、消えもしたらう。然し殘らず消えはしない。幾何か宛殘りてその思想は芽を萠き、彼等の豫期せし如く世道人心の覺醒すべき時が來たのである。彼等は實に信仰の生涯、理想の世界に生活した者で、今行ふべきことなれど。今行はれざることを説いた大理想家、大空想家、大豫言者である。

一度は魔法使と呼ばれ國賊と罵られ、氣狂と嘲けられても、彼等は實に人生人道の根本に基いた威大なる信仰を持つてゐた。その信仰たるや實に萬世萬代を通じての尊いもので、よし其の時代には行はれなかつたが、後の世に於て認めらるゝことを得た。然して世人は今更の如く彼等を崇敬するに至つた。彼等は決し

て普通の冥想家ではない。その説は實に人心の根本、人類の根元に基いた大信仰大理想である。

△大信仰の迫害

萬世の英雄は、必ず前云ふ如く大信仰を持つ、耶蘇と云ひ、釋迦と云ひ、孔子と云ひ、ソクラテースと云ひ、皆これ大信仰家に非らざるはない。唯此の時代が此等の信仰を認めなかつたと共に、十字架、飢餓、毒殺貧困等あらゆる壓迫を彼等の身の上に加へた。のみならず、彼等の家族、一族、周圍の者等總て天下の者は同盟して彼等に迫害を加へ、其の信仰を破壞せんとした。然し彼等の信仰は決して此等に破壞されなかつたが、此の壓迫、迫害の爲めに、彼等の生涯が如何に慘澹たるものであつたかと思へば、吾々は實に同情の涙に堪えぬのである。

『空の烏は塒ありと雖、人の子に枕する處なし』、耶蘇は斯ういつて、流石に自己の生涯の哀れさを述べた。釋迦とてその通り、傳ふる所に依れば七十有餘の年、その身を或川の端邊に横へ、老婆から僅に水を貰つて其處で最後を遂げたといふことである。果して然うすれば殆んど其の死は野倒死に均しいものだ。ソクラテースとても亦その通り、彼が最後は毒殺に終つた。其の境涯の悲慘なること、釋迦と云ひ、耶蘇と云ひ、ソクラテースと云ひ少しも異らない。

然らば彼等は、斯くも社會國家、一家一族其の他あらゆる者から苦しめられて弱つたかと云ふに少しも弱らない。吾が信仰、吾が理想は必ず行はれる時が來る と云つて、少しもこれを悲しまなかつた。然し彼等とて矢張り吾人と同じ人間である。吾人の苦を感ずるものはやはり彼等とて苦と感ずるに違ひないが、彼等はその永遠無窮に繋る威大なる思想信仰により、『若し此の思想信仰を天下萬衆に傳へざれば、世道人心を如何にせん、萬世の蒼生を如何にせん』と、たゞこれを思ひ、これを憂ひて、あらゆる慾と戰ひ、名譽飢餓と戰ひ、惡口、罵詈、苦痛、國法、帝王、家憲、人民と戰ひ、以つて信仰の敷植に努めた。併し彼等とて同じく

人間であれば、十字架、毒殺、或は自然の命と共に脆くも倒れたが、其の精神と信仰とは人生人道に缺くべからざるものであるから、後にはこれを殺せし王も神と信じ、これを罵りし人民も佛と敬し、寺を建て、神社を設け、以つて其の靈を祀り、天下萬衆はこれを英雄とし、神とし佛として崇拜するに至り、後世の萬民は、精神上、物質上共に此等に依賴すれば、如何なることも必ず得るならんと信ずるやうになつたのである。

此の通り、彼等の信仰は實に遠大無窮のものであつて、彼等は此の信仰、即ち人生人類の根本と終局とを考へ、それに到達せしめんとする目的と、自覺とより得たる一大確心せし所を行つたものである。萬世の英雄は必ず此の信仰を欲す。然もその信仰は人生人道の最大要求に因つたもので、假令天地碎け、乾坤裂くとも雖此の信仰のみは決して動かない、頽れない所のものである。

△犧牲の大精神

彼等には又此の信仰の外、犧牲の大精神があつた。彼等の全身は悉くこれ英雄の精神を以つて固り、彼等の肉、彼等の衣食、彼等の名譽利達、其の他人としての凡ゆる彼等の慾は、犧牲の大精神を以て絶たれてゐる。然して其の信仰を傳へんが爲めにあらゆる萬難萬苦と戰ひ、人を救ふの道を說かんが爲めに、我身は老の來るをも知らず、熱火に燒かれ、劍戟に刺さると雖、彼等は殆んどこれを意に介せずして、其の生涯を終つた。これ大いなる犧牲に非ずして何ぞ、彼等の光明、彼等の名譽は、實に迫害、毒殺、貧困、殺戮等の憐れむべき名詞に彩られ、其の一生涯は慘澹悲劇に終つてゐる。これ皆大犧牲に滿されたもので、彼等の行爲行動に決して其の時代の爲め許りでなく、百代萬代に亘る永遠の目的を以つて、敢て此の犧牲に甘んずべく餘儀なくされたのである。決して彼等は其の時代限の成功などは欲しない。彼等は其の成功を天下萬年の後に期した。此成功を萬年の後に期した者、如何して大いなる犧牲の精神なくして成し遂げられやう。

然し、彼等は誰の爲めに斯る犧牲者となつたか、決して私の心を滿す爲ではない。耶蘇、釋迦、ソクラテース、孔子皆な天下萬衆の爲めを謀つて、敢て斯る犧牲者となつたのである。此の犧牲こそ眞に尊い崇むべきもので、萬世の英雄は獨り確心せる信仰許りでなく、此の無限の最大なる犧牲を持つ。彼等の血はこれが爲めに流され、彼等の肉はこれが爲めに屠られ、然して彼等の心血は此れが爲に躍り、之れが爲めに燃えたのである。百世の後世界萬民より神と呼ばれ、佛と

藏原惟郭氏

敬せらるゝも怪しむに足らぬ。

然らば、彼等には決して自己がないかと云ふに、然うでない。釋迦は『天上天下唯我獨尊』と云つた。即ち自己の爲めの自己でなく、天下萬民の自己と一致する自己である。萬生萬衆を抱合し、愛と性とを以つて抱合したる最も尊き自己で、歴史の目的を代表したる自己である。彼等は實に永遠無窮の自己を有す。然しその自己は決して利己ではない。一代五代十代にて消滅し、或は浮沈す

る自己ではない。千代萬代を通じ、人道と共に永遠無窮に發達する所の自己である。彼等の自己が大きく發達し、終に乾坤を叫斷するに至りしも怪しむに足らぬ。又耶蘇が『吾は神である』と云ひしも何んぞ怪しむに足らぬ。彼等が又匹夫より萬世の英雄となりしも、何んぞ怪しむに足らぬ。我等は斯る見地よりして彼等を絶對に神と信じ、釋迦も耶蘇もソクラーテスも孔子も神であると信ずるのである。即ち彼等は歴史上偉大なる神である。隨つて彼等と靈を同うしたる吾人も、斯る意味に於ての神とならざるべからず、又なれないことはない。

今日此の動機を吾人に引起さしめ、此の秘密を知らしめ、此の覺醒を與へんが爲めに釋迦も耶蘇も、ソクラテースも、ルーテルも、ヨハネも、ピートルもカールも、ポーラーも、エマーソンも出て來たのである。唯獨り疑ふらくは人生の眠深うして、今に彼等萬世の英雄が殘したる威大なる精神、威大なる信仰を十分に解する者の少ないことは返す〳〵も遺憾である。

△所謂る百世の英雄

次に位する百世の英雄と雖、死後永くその價値を損せざるものである事は云ふまでもない。たゞ彼等が萬世の英雄と異るは、彼等が到達せしめんとする目的が萬世萬古に亘らず、多くは一國の子孫人民の爲めを謀つたものに限られてゐる。從つて彼等の中には多く帝王、政治家、革命家、文豪等がある。假令ば米のゲシントンの如き、人權自由の爲め北米の命運を荷ふて起つた百世の英雄で、今日ワシントンの盛大なるを見ても、此の人の事業が北米の天地に十分顯はれてゐることが知られやう。又其の企ては完成すべく今に殘されてゐる。此の他獨のビスマーク、英のグラッドストン、ヤーブル、マヂヲ、或はインマヂローの如き、獨のフレデリック大王、或はピートル大帝、リンコルンの如き、或は日本の十五代將軍慶喜公の如き、或はこれを助けたる勝海舟の如き、或は又一面に西郷、大久保の如き、或は佐久間象山、吉田松陰の如き、或は支那の

宗國藩の如き、皆これ百世の英雄で、國家の休戚、國家の命運を荷ふて起つた者である。

斯る人は、全く國家の經營、經綸者、又は改革家で、萬古の英雄とは自ら同一ではないが、決してその經營、經畫も唯目前の目的を以つて行つた者ではない。その計畫した所は所詮五年、十年、五十年では解らない。何處迄も國家の安寧休戚を目的として事を行つた者である。又彼等の信仰は、無論萬古の英雄とは異るも、矢張り立派な信仰を持つてゐた。彼等は此の信仰に依り、國家を經營經綸せんとした者である。此れが爲め、社會からは罵られ、世論からは反對された者であるが、彼等は要するに棺を蓋ふて後、始めて其の人物事業が世人から解せられるもので、決して彼等は自己の名譽利達を謀らうとした者ではない。彼等が現在に必要として行つた所のものは、其の時代、又は或一部分に必要のものではなく、永久に其の國に必要なるものであつた。

彼等は非凡なる自己の信仰に基き、社會國家を經營せんとする時は、假令萬衆が擧つてこれを非とするも是としてこれを行ひ、一身を犧牲に供するも國家の爲を思ひ、斷々乎としてこれを行つたのである。豈大なる確心なくして如何して爲し得やう。即ち彼等にも亦大なる犧牲の精神があつた。彼等は實に犧牲の集晶にして、又信仰の結晶體である。

勿論、その信仰犧牲は耶蘇釋迦の如き威大なるに及ばずと雖、同じ精神、同じ覺悟、同じ態度、同じ行爲を有し、最大の名譽財産も取るに足らずとなし、社會國家の爲め全力全身を盡して自己の信ずる所を行つたのである。たゞ彼等の信仰は其の國一國に繫り、萬古の英雄はその信仰が永遠に人生人道につながる其範圍の程度が異る丈けで、彼等も百歳千歳に名を止むべき立派の英雄たるは云ふまでもない。

△時代の英雄

第三の時代の英雄も亦、身分相應の信仰と犧牲とに富んでゐる。その信仰も決して言目的の信仰でなく、

動すべからざる信仰である。即ち社會國家を自覺した
る信仰、社會國家も自然とそれに對せねばならぬ信仰、
又社會國家も必ずこれを行はねばならぬ所の信仰であ
る。故にその事業も決して十年五十年で徒勞に屬する
ものではない。彼等は吾が爲す所は國家國民の義務で
あると總てを樂觀し、無邪氣の精神を懷いて事に當る
は勿論、人間の欲望、苦痛を抑へ、所謂る身を殺して
仁を爲した者である。此の精神の威大なるもの、猛烈
なるものに非ざれば、如何に一世に卓絶しても決して
英雄とは云はれぬ。

△目前の英雄

此の見地から見る時は、第四の英雄即ち目前の英雄
の如きは、假に英雄と云ふも、唯自己の利害關係を目
的とするものであるから、政治家たると改革者たると
を問はず、決して眞の英雄とは云へぬ。
何となれば、彼等は第一に信仰を缺き、第二に犧牲
を缺く。會々彼等に信仰があつても、それは己の爲を
謀る信仰で、その信仰は必ず時間の爲めに葬られる。
即ち病、死。浮沈等の爲に消されて了ふものである。
のみならず彼等の信仰は却つて、社會國家の害毒とな
り、世道人心の腐敗となる。會々彼等に牲犧があつて
もそれは僞善で、結局自己の慾を達せん爲の犧牲であ
る。其の信仰犧牲の全然僞善であることは、これを他
の英雄に比すれば、自ら其の正邪、曲直、是非は判明
される。然し世の中は、案外我利々々坊者に閉されて
ゐるから、中にはこれを英雄として崇拜する者もある
が、これは結局自己の名譽利達に渴せる夜叉の如き輩
のみ。

△結論

斯く世の中には、何れが社會國家の爲を謀りし英雄、
何れが自己の利害榮達を謀りし英雄、何れが萬世萬古
の英雄なるかを識るの明なき者あるは、實に慨嘆に堪
えぬ次第である。此の爲めに先きには、釋迦、孔子、
ソクラテースを殺し、これが爲めに後にはリンコル

ン、西郷、大久保の徒を殺し、これが爲に幾多の救世主、幾多の英雄を殺し、全く彼等の信仰と精神とは其の血と涙とに依つて傳へられたものであるを思へば、吾等は眞に同情の涙を禁ずることが出來ない。

歴史は實に慘劇のものである。

然し何時の世と雖も人道は必ず正道で、よしその時代の惡風潮、惡習慣に依り、一時それは隱蔽されることがあるとは云つても、全くその全部を蔽はれ、全くその勢力を失ふことはない。此の一點は誠に人道の幸福である。故に世人萬衆は、一方に深く人生の經驗を積むと共に、歴史の眞隨を味ひ、人生奮鬪の眞義を發明するに至つて、始めて先きには國賊と呼び、狂者と嘲けりてこれを殺し、これを害せし吾等の大恩人、大聖人、國家の英雄豪傑の精神を了解するに至り、或者は此の精神と同化せんとし、或者は此の遺業を繼續して行かんと協力奮鬪し、なほ及ばざる者はこれを神とも呼び、佛とも呼んで、彼等英雄を崇拜するに至つたのである。

斯の如く、聖人英雄の事業は、假令其の時代には認められなかつたとは云つても、よくその事業は大を重ね、大を積み、後に至り大いなる成功をなしたもので、其の事業は眞に大器晩成である。此の大器晩成には、必ず以上に述べた大信仰と、大犧牲との精神を要するのである。

苟も天下の青年にして、社會國家を思ひ、一國を双肩に脊負つて起ち、教育世經に志ある者は、大に前者の歴史に顧みるところあつて、深き信仰を懷き、これを人間生上の根柢として磐積し、目的を遠大に据ゑ、然してこれに達するに奮鬪苦戰、克己、勉勵、死を以つて當るの大決心を有し、力のあらん限り犧牲の精神を以つて百難と戰ひ、萬障と戰ひ、以つて歴史上の英雄たる覺悟を持たねばならぬ。

都會の夏と田舍の夏

(1) 歡樂の時、活動の時

島崎藤村

盆が近附いた。舊兩國の通街には、趣味の多い草市が立つ時となつた。私は長らく田舍に住ひしてゐたので、恰度此の頃になると、小諸の祇園の祭を思ひ出す、家毎に青簾を掛けつらねたあの地方の小都會の有樣など思ひ出す。私は、今此の町中に住ひしてゐるので、此處で田舍のことを思ひ浮べて見て、何時も少なからぬ興味を感ずる。

都會——殊に下町の夏は、極めて趣味の多い時である。わけても暑い一日を終つて、街々に燈火の輝く頃から、夜へかけて此の感じが深い。

古い江戸の趣きを傳へた燈籠の灯や、瀟洒な浴衣などを着て、趣きのある團扇などを携へた男女の態を見ると、其の風俗と云ひ、色彩と云ひ、都會の趣味を到る處に見出すことが出來る。都會の夏の夜は一面歡樂の時で、娯樂の機關なども備つてゐる。此の夏の夜に、私共が、涼しい街々で見出す趣味の多趣多樣なことは、到底、田舍に於ては味ふことの出來ないものである。都會の人の鋭敏な感覺は、斯ういふ時に觸れて最もよく發揮されてゐる。實に都會の人のよく聞き、よく視、よく味ふと云ふことに富んでゐるのは、天性だと云つてもよい。田舍者の眼には映り惡い澁味をも、都會の人は、よくこれを解してゐる。田舍者の聞きわけ惡い歌詞、音曲、或は訛言のない言葉なども、都會の人はよくこれを聞きわける。田舍者の舌は、草深主義を貴む方であるが、都會の人の口は、量よりは質を取ると云ふ風で、遙に細い、複雜した味でなければ滿足しない。着るものにしても、田舍者はゴツ〳〵した地織で濟すが、都會の者は、趣味の多い物を着る。

斯ういふ風に考へると、都會の夏の夜は優美であ